

令和4年度(2022年度) 第1回とよなか都市創造研究所運営委員会 議事要旨

日 時 : 令和4年(2022年)6月30日(木) 15時00分~16時40分
傍聴会場 : 人権平和センター豊中3階
出席委員 : 石川委員、草郷委員、肥塚委員(委員長)、宗野委員(副委員長)、井加田委員
事務局 : 森田、石村、松田、比嘉、平田
傍 聴 : 0人
備 考 : 対面型会議とZOOMによるオンライン会議の混合で実施した。

○開会

事務局から開会挨拶と、満島委員の辞任により令和4年4月1日から1人欠員になった旨の説明があった。

○案件(1) 令和3年度(2021年度)事業報告について

資料: 資料1「令和3年度(2021年度)事業報告について」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。質疑応答はなし。

○案件(2) 令和4年度(2022年度)調査研究について

資料: 資料2「令和4年度(2022年度)調査研究について」

≫ 「豊中市における社会的処方への推進に関する調査研究」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・ 委 員 : 今年度の研究は、3つで1セットと考えてよいか。研究の目的は、住み慣れた地域で健康に生活し続けるための方策を、社会的処方、孤独・孤立といった切り口で考えているという理解でよいか。ならば、最後は提言までもって行ってほしい。
- ・ 事務局 : ご指摘の通り。健康と都市政策という大テーマのもと、3つの小テーマに分けて研究する。その場合、地域共生社会といった観点も大切になるかもしれない。テーマ間で重なる部分もあるが、それぞれの位置づけやどう連携していくかは、これから決めていく。
- ・ 委 員 : 経済的要素などと健康の関係を研究する社会疫学の観点をふまえると、より興味深い研究になるかもしれない。社会疫学でいうと、海外では都市空間が健康にあ

たえる影響の研究が進んでいて、まちの歩きやすさ、犯罪率、緑地面積などと健康の関係が調べられているが、日本ではまだデータがない。

- ・事務局：社会疫学については手薄だったが、その考え方も取り入れていきたい。都市空間については、今後実施予定の勉強会ではハード部門の方にも参加してもらおう予定にしている、研究全体の中でもハード部門の観点も入れながら進めていく。
- ・委員：社会的処方の研究には、3つのフェーズがある。まず、どんな社会的資源があり、それをどう見つけていくか、そして、資源を求めている人をどうやって探すのか、最後に、求める人と求められる資源をどうつなげていくか。今年度は資源を求めている人を見つける段階だと思う。1年ですべて扱うのは難しく、長い目で研究してほしい。
- ・事務局：豊中では、資源につながることを求めている人を探す、資源を作っていく、人と資源をつなげるということを社会福祉協議会のソーシャルワーカーの地道な実践の蓄積がある。社協の取り組みに学びながら研究を進めていきたい。特に資源へつながりを求めている人を探すには、医療機関の役割が大切である。地域につながっていない人も病院には行く。医者が何かを発見したときに、地域とつなげていくことができるのではないかと、これが社会的処方を実践する大きなきっかけになると考えている。
- ・委員：社会的処方を施したあとに人はどうなるのかも視野に入れてほしい。WHOでは、健康はWell-beingと定義している。病気の有無ではなく、社会的に生き生きと生活できることが大事。そのような考え方と今回の研究を関連付けてはどうか。これは地域福祉とも直結する。処方された後のことも視野に入れてほしい。また、豊岡市や社協の事例だけでなく、ITなどを使った都市型モデルや企業のアプローチも参考にしてほしい。
- ・事務局：社会的処方の目指すものとして身体健康だけでなくWell-beingを考えることは大事だと思う。企業のアプローチも参考にしたい。

≫ 「豊中市における孤独・孤立に関する調査研究」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員：タウンゼントの孤独と孤立の定義は1957年のものだが、これで大丈夫なのか。
- ・事務局：タウンゼントの孤独と孤立の定義は半世紀前で古いですが、今回の調査研究で検索したどの文献を見てもタウンゼントを引用しており、確立された定義としてここで用いても構わないものと考えられる。
- ・委員：国と豊中の比較をするのであれば、調査方法も同じにしなければならない。また、

国の調査は全国にわたるので、都市部と農村部が混ざっている。内閣府のデータをもらって、都市部をグルーピングして比較したほうがいい。

- ・事務局：国はサンプリング方法などを公開していないので、まったく同じにすることはできないが、設問の内容の同一性に基づく比較としたい。内閣府にデータの提供を依頼する件については検討する。
- ・委員：孤独・孤立を最終的にどういう状態にもっていくのがゴールなのかを設定した方がいい。ゴールが明確な方が他部局ともそろえやすい。
- ・事務局：孤独・孤立は見えにくい。個人の心の中の問題でもある。ここでは、孤独・孤立に陥っている人をどうやって支援につなげるかの参考となる研究としたい。
- ・委員：国のデータと比較するだけで終わるのではなく、最終的にどこへ向かうのかを見据えて何らかの分析をした方がいい。例えば仮説をたててみると、分析の方向が決まる。
- ・事務局：今、具体的な仮説があるわけではないが、孤独・孤立の要因の切り分けなどは調査票の設計からも可能であると考えている。分析の方法を検討したい。

≫ 「豊中市における健康データの利活用に関する調査研究」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員：政策提言につながるような研究ということだが、現在の政策評価も含まれるのか。
- ・事務局：現在の政策の効果を見ることも想定している。特に被保護者のレセプトデータ分析について、保健指導の予防効果や医療費への影響を分析していきたい。
- ・委員：他のデータも活用を考えているか。
- ・事務局：レセプト以外のデータの活用はまだ検討中だが、たとえば豊中市の検診率が低い理由を分析するなどが考えられる。
- ・委員：医療のデータは膨大なので、何を見ているのかわからなくことがある。せつかく良いデータがあるので、まず軸を決めて、大テーマから外れていかないように分析してください。
- ・事務局：大きな視点とミクロな視点を両方もちながら進めていきたい。
- ・委員：先進的な自治体のデータ利活用の取り組みはあるか。
- ・事務局：政令都市のような大都市では、一定の費用をかけてデータ基盤を構築し、大学と連携して取り組んでいる。中小規模自治体では進んでいないと感じる。

- ・委員：健康データを整理しても、組織の中の壁があって活用できないこともある。今回、どの部署にどのようなデータがあるかを調査したり、データベースを運用する関連部局にヒアリングしていくのはとてもよいことだと思う。
- ・委員：大学との連携で、医療や経済分野の学識経験者があがっているが、統計分野の学識経験者も候補にあげられるのではないか。
- ・事務局：今後も研究を進める中で、つながれる学識経験者や専門家を探していきたい。
- ・委員長：今年度3つの小テーマで進めることはよいが、最終成果の報告書では、まず、なぜこの3つにしたのか、3テーマの位置づけ、役割分担、関連などを説明することが必要。今日いただいた意見を参考に進めてください。

○案件（3）令和4年度（2022年度）機関誌について

資料：資料3「令和4年度（2022年度）機関誌について」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。質疑応答はなかった。

○案件（4）令和4年度（2022年度）とよなか地域創生塾について

資料：資料4「令和4年度（2022年度）とよなか地域創生塾について」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員：塾生は女性が多い、年代は20～40代が多いということだが、学生を見ていても、仕事以外のことで地域と関わりを持ちたいという意欲を感じている。そういう世代にアプローチする事業としてもよいことだと思う。
- ・事務局：創生塾は、広報やチラシの他、SNSや卒塾生の紹介で広がるため、多世代が参加するという特徴がある。

○案件（5）その他

≫事務連絡

- ・令和3年度調査研究報告会のご案内。令和4年7月8日14時～。
- ・次回運営委員会は10月ごろを予定。

○閉会